

ルカによる福音書1章57-80節 「主の先駆者の誕生」

1A 母に示された憐れみ 57-66

1B 共に喜ぶ人々 57-58

2B 驚き、畏れる人々 59-66

2A 父に与えられた賛美 67-80

1B 預言 67-79

1C 聖霊の満たし 67

2C 救いの角 68-75

1D 敵からの救い 68-71

2D 主に仕える救い 72-75

3C 道備え 76-79

1D 罪の赦しの救い 76-77

2D 暗闇の光 78-79

2B 幼子の成長 80

本文

ルカによる福音書1章 57 節を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、ルカ1章の後半に入ります。前回からルカによる福音書を読み始めていますが、ルカは、イエス様の誕生だけでなく、主が来られる先駆者であるバプテスマのヨハネの誕生を記しています。天使ガブリエルが、まずヨハネの父ガブリエルにヨハネが生まれることを告知しました。ところが、ザカリヤはそれを信じませんでした。それで、確かに神の言葉の通りになることを示すために、彼の口を利けなくされました。その間に妻エリサベツには子供が与えられました。そして、ガブリエルはイエスの母マリアに現れて、イエスを身ごもることを告知したのです。処女から、聖霊の力によってイエスを身ごもることを知ったマリアは、ザカリヤと違って、そのまま神のことばが自分の身になりますように、と応答しました。一方は祭司、もう一方は片田舎の若い娘です。しかし、すべてを変えるのは信じるか、信じないかであります。

そしてマリアは、エリサベツの家に行きます。なんと、ヨハネは生まれる前から、マリアが近づいてきたのを見て、エリサベツの胎の中で喜び躍るのです！それでマリアは、神に賛美し、歌いました。彼女は、「1:54 主はあわれみを忘れずに、そのしもベイスラエルを助けてくださいました。」と歌っています。神が救い主を遣わしてくださることを、憐れみを忘れないでいると言いました。

今朝、私たちは、「神が憐れむ」ということについて知りたいと願います。神が、私たちに憐れんでくださいます。憐れむとは、苦しみの中、縄目の中にいる時、病の中にいる時、そういった辛い

状況にいる時に、具体的にその状態から解き放ってあげる行為です。イエス様が、良きサマリア人の喩えを離された時、それを聞いていた律法学者に、誰が隣人になったと思いますか？と尋ねたら、一人が、「10:37 その人にあわれみ深い行いをした人です。」と答えています。十人のツアラアト、つまりらい病の患者がイエス様に声を張り上げて、「私たちがあわれんでください。」と言いました(17:13)。そして、彼らが癒されました。これが、「憐れみをかける」ことでした。つまり、ただ同情するだけでなく、声をかけるだけでなく、実際に憐れみの行為を行うことです。

今でも、思い出しますが、ちょうど 8 年前、東日本大震災の津波の被災地に行った時に、気仙沼の港町で、救援物資を一軒ずつ回ってお渡ししていきました。すると、本当に安堵の思いと涙を流して、「ありがとうございます」とお礼を受けました。憐れみというのが、私たちの魂に重くのしかかっているものを取り除き、平安で満たしてくれます。けれども、聖書はさらに深い、もっともっと根本的な憐れみを、私たち一人一人にお与えになろうとしています。そのことを、バプテスマのヨハネの誕生の話から見ていくことができます。

1A 母に示された憐れみ 57-66

1B 共に喜ぶ人々 57-58

57 さて、月が満ちて、エリサベツは男の子を産んだ。58 近所の人たちや親族は、主がエリサベツに大きなあわれみをかけてくださったことを聞いて、彼女とともに喜んだ。

前回、見ましたように、ザカリヤと妻エリサベツは祭司の家であり、もう年老いていたのに、子が与えられていませんでした。ところが、彼女が身ごもりました。近所の人たちは、それを見て、主が大きな憐れみをかけてくださったと知ります。また、親族の人たちも主の憐れみを感じました。当時、子がないということは「呪い」というぐらいの重みがありました。産めよ、増えよ、という神の祝福の命令を守ることができていないのは、何か呪いが置かれているとまで考えていました。ところが、子を宿し、そしてついに男の子を産みました。「主がエリサベツに大きなあわれみをかけてくださった」とありますね。彼らは、男の子という、目に見える存在によって、主ご自身が憐れみをかけてくださったのです。

そして、「彼女とともに喜んだ」とあります。エリサベツだけでなく、周りの人々も同じように主の憐れみを知りました。すばらしいですね、私たちも共同体です。一人が喜べば、それは仲間すべての喜びであります。

2B 驚き、畏れる人々 59-66

しかし、この喜びは次に、驚きになり、恐れにさえなります。私たちの中には、主の憐れみは人々に理解され、喜びとなることもあります。けれども、その憐れみがあまりにも深く、人々に理解されず、驚き飽きられる場合さえあります。

59 八日目になり、人々は幼子に割礼を施すためにやって来た。彼らは幼子を父の名にちなんでザカリヤと名づけようとしたが、60 母親は「いいえ、名はヨハネとしなければなりません」と言った。61 彼らは彼女に「あなたの親族には、そのような名の人は一人もいません」と言った。

主がアブラハムに子を与える約束されて、イサクが生まれました。そして契約の子であることの印として、生後八日目に割礼を施すように主は命じられ、アブラハムはそれを行いました(創世17:12,21:4)。イエス様も割礼を受けられました(2:21)、今もユダヤ人たちの多くが割礼を生後八日目に受けています。その記念すべき日に、当時、生まれてきた子に名を付ける習慣がありました。父や祖父の名にちなんだ名を付けることが多かったのですが、いきなり母エリサベツが、「いいえ、名はヨハネとしなければなりません」と言ったのです。ここの「いいえ」は、かなり強い言葉が使われていて、「いや、違う！ οὐχί」と強く否定している表現です。そして、「ヨハネ」・・・「神は恵み深い」という意味ですが、ヨハネにするというのです。これは、あまりにも常識外れで、彼らの習慣から外れています。家族どころから、親族にさえそのような名は一人もいないと抗議しています。

62 そして、幼子にどういう名をつけるつもりか、身振りで父親に尋ねた。63 すると彼は書き板を持って来させて、「その子の名はヨハネ」と書いたのです、人々はみな驚いた。

エリサベツが何か気がおかしくなってそんなことを言っているのだらうと思ったかっただけでしょう、父親ザカリヤのほうに尋ねました。身振りで尋ねているのですが、ということは、ザカリヤは口がきけなくなっただけでなく、耳も聞こえなくなっていたのでしょう。そして、ザカリヤまでが、「その子の名はヨハネ」というので、人々が驚き、あきれたのです。これは、喜んで驚いているのではなく、不信になって驚いていると言った方がいいです。

私たちの生活で、神が介入される時に、人々に理解されなくて驚かれることがあります。私もイエス様を信じた時に、両親から驚かれ、姉には全く理解されませんでした。その驚きはもちろん、喜びでは全くありません。けれども、私が変わって行くのを二人は見てきました。そしてついに、二人も信仰を持ちました。それは姉にとって、驚きでした。これもまた不信から来る驚きです。それは、本当に深い、深い、神の憐れみなのですが、その深さは到底、人の理解を超え、驚かれます。私たちの生活には、こうした驚きをもたらす神の御業が用意されています。

64 すると、ただちにザカリヤの口が開かれ、舌が解かれ、ものが言えるようになって神をほめたたえた。65 近所に住む人たちはみな恐れを抱いた。そして、これらのことの一部始終が、ユダヤの山地全体に語り伝えられていった。

彼らは、今度は驚きを越えて、恐れを抱きました。九か月前、神殿で主に仕えて、そこから出てきた時に口がどもった時以来、彼は語れなくなりました。たった今、ヨハネだと書いた時に、ものが言

えるようになったのです。物が言えて、しかも神をほめたたえる言葉を言っているのですから、「これは、ただ事ではない」という恐れになったのです。そして、そのことが一部の出来後ではなく、ユダヤ山地全体に広がります。ヨハネが後に活動を始める時に、「あのヨハネだ」ということになるのでしょう。

しかし、ザカリヤにとっては、さらなる霊的な成長だったのです。彼は、正しい人であるとルカは書き記していました。その正しい人であるはずの人が、神の訪れを信じることができなかったのです。主が何を行われているかを聞くことをせず、自分が語ってばかりいるので、しっかりと主がなされていることを聞くために、主は彼の口を閉ざされたのです。その沈黙の九か月によって、彼の心は清められました。「神は確かに、ヨハネという名のとおりに恵み深い方なのだ。それは、驚くべき恵みを私たちに施してくださっているのだ。それを、こともあろうに自分の疑いや不信仰でだめにしようとしていた。しかし今、私はとてつもない神の憐れみを知った。」そこで、彼の心には神をほめたたえる言葉で一杯になっていたのです。

皆さんの中にも、何か不便や不自由が強いられているかもしれません。身動きが取れない状況にある方がおられるかもしれません。けれども、その時に尊い神の憐れみの働きが行われているかもしれません。その声を聞き、真実の解放が与えられているかもしれません。

66 聞いた人たちはみな、これらのことを心にとどめ、「いったいこの子は何になるのでしょうか」と言った。主の御手がその子とともにあったからである。

彼らは驚き、恐れ、そして次に、「心にとどめ」ました。あまりにも強烈な出来事なので、心に深く刻み込んだのです。私たちも同じように、主の御手があることを知る時、それを心に留める、単に念頭に入れておくのではなく、心に深く刻み込む必要がありますね。イスラエルの民は、多くの奇蹟を見たのに、荒野において不平を鳴らし、滅ぼされてしまいました。深く心に刻み込んでいなかったからです。

2A 父に与えられた賛美 67-80

1B 預言 67-79

1C 聖霊の満たし 67

67 さて、父親のザカリヤは聖霊に満たされて預言した。

口が開いたら、神をほめたたえたとありましたが、その中身をルカは詳しく書き残しています。まず、ルカは、聖霊の働きを克明に記しています。マリアが身ごもる時も、聖霊が彼女の上に臨むので、いと高き方の力によって、イエス様が生まれると約束されました。そして身ごもったマリアを見て、エリサベツが聖霊に満たされて、マリアを最も幸せな女として称賛しました。このことばは、基

本、神のことばです。あるいは、神の御心に沿った言葉です。そして今、ザカリヤが聖霊に満たされています。そして預言をしています。主は、私たちが聖霊に満たされるを望まれています。そして、その時に主の御心に沿った、信仰の言葉、預言の言葉が与えられることがあります。

2C 救いの角 68-75

1D 敵からの救い 68-71

68 「ほむべきかな、イスラエルの神、主。主はその御民を顧みて、贖いをなし、69 救いの角を私たちのために、しもベダビデの家に立てられた。70 古くから、その聖なる預言者たちの口を通して語られたとおりに。71 この救いは、私たちの敵からの、私たちが憎むすべての者の手からの救いである。

ザカリヤは、イスラエルの民を神が贖ってくださること、そして「救いの角」を与えてくださったことをほめたたえています。角というのは、雄牛の角であるとか、力を表します。自分に襲いかかろうとしている敵どもに対して、力をもって突き倒していく雄牛のような勇猛さを示しています(例: 申命 33:17) イスラエルの民が、物理的にもそのような敵に囲まれて生きて来たし、そして霊的にも、そうした敵によって虐げられている姿であります。そこに救いの角として現れくださる方が、ダビデの家系から出て来る、ということです。そして、「古くから、その聖なる預言者たちの口を通して」とありますが、ダビデ本人に預言者ナタンを通して、この約束を与えられていたし、またアブラハム、イサク、ヤコブに対して主は、救いの角でありキリストを与えられる約束を下さっていました。

私たちにとって、「敵」とは誰でしょうか？当時のユダヤ人は、自分たちを虐げているローマこそが、自分たちの敵であり、ローマの圧制から救い出されることが、メシアがしてくださることだと思っていました。私たちもともすると、そういった救いを求めるのではないのでしょうか？敵がいて、自分に敵対している人や、周りの環境があって、それを主が打ち砕いてくださり、無くしてくださることを願うかもしれません。

けれども、主が敵から救ってくださることは、単に物理的なことではなく、もっと霊的なことです。エバが蛇に惑わされて、そしてアダムが罪を犯して、それで神と人は引き離されました。そそのかした蛇に対して、「創 3:15 わたしは敵意を、おまえと女の間、おまえの子孫と女の子孫の間に置く。彼はおまえの頭を打ち、おまえは彼のかかとを打つ。」と主は言われたのです。ここでの敵とは、蛇の背後にいるサタンであり、そしてサタンが罪の中に私たち人間をがんじがらめにしているところから、女の子孫によってサタンに頭を砕くというのが、救いでもあります。

アブラハムに対して、主が約束を下さいました。その子孫によって、全ての民族が祝福されるという約束でありましたが、こうも主は言われたのです。「創 22:18 22:17 確かにわたしは、あなたを大いに祝福し、あなたの子孫を、空の星、海辺の砂のように大いに増やす。あなたの子孫は敵

の門を勝ち取る。」敵の門を勝ち取る、と言われたのです。そしてリベカがイサクのお嫁さんになる時も、リベカの家族は、「24:60 あなたの子孫は敵の門を勝ち取るように。」と祝福しています。

主の与えてくださる救い、その憐れみは、単に苦しい状況を無くすということではありません。もっと深いもので、それは私たちが罪の中にがんじがらめにしている、敵の脳天を打ち砕くという救いなのです。パウロは、コロサイの人たちにこのように神の救いを説明しています。「コロ 2:14-15 私たちに不利な、様々な規定で私たちが責め立てている債務証書を無効にし、それを十字架に釘付けにして取り除いてくださいました。そして、様々な支配と権威の武装を解除し、それらをキリストの凱旋の行列に捕虜として加えて、さらしものにされました。」ローマが、外敵を打ち破った時に、分捕り物を持ち帰り、その捕虜を持ち帰り、凱旋の行列に加えさせます。それと同じように、主が十字架と復活の御業によって、サタンともろもろの悪霊の力を打ち砕き、彼らを虜として引いて行っているのです。パウロは、福音は、「ロマ 1:16 信じるすべての人に救いをもたらす神の力」と言いました。

2D. 主に仕える救い 72-75

72 主は私たちの父祖たちにあわれみを施し、ご自分の聖なる契約を覚えておられた。73 私たちの父アブラハムに誓われた誓いを。74 主は私たちが敵の手から救い出し、恐れなく主に仕えるようにしてください。75 私たちのすべての日々において、主の御前で、敬虔に、正しく。

主が、敵の手から彼らを救い出すその目的は、敵からの恐れがなくして、主に仕えるようにするためであるということです。しかも、敬虔に、正しく仕えることができるようにするということでもあります。私たちは、敵の手から自由にされたら、自分は自分の望むままに生活することが自由にされることなのだ、と勝手に思っています。けれども、それはまだ、虜のままです。パウロは、「ロマ 6:16 あなたがたは知らないのですか。あなたがたが自分自身を奴隷として献げて服従すれば、その服従する相手の奴隷となるのです。つまり、罪の奴隷となって死に至り、あるいは従順の奴隷となって義に至ります。」どちらかに仕えることによって、もう一方から自由にされます。罪に仕えれば、罪の奴隷ですが、神から自由にされています。神に仕えれば神の奴隷ですが、罪から自由にされています。その中間はないのです。中間だと考えていることこそが最も厄介で、本当は罪の奴隷なのに、そうではないと言い張るからです。

私たちは、行いによらず、信仰によって、神の恵みによって救われます。けれども、良い行いをするために救われました。「エペ 2:10 実に、私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをあらかじめ備えてくださいました。」神の愛の中で、もはや恐れに陥れる奴隷の霊に怯えることなく、喜んで主に仕えることができるようにされたのです。

3C 道備え 76-79

1D 罪の赦しの救い 76-77

76 幼子よ、あなたこそいと高き方の預言者と呼ばれる。主の御前を先立って行き、その道を備え、

77 罪の赦しによる救いについて、神の民に、知識を与えるからである。

ここでようやく、ザカリヤは自分の息子ヨハネに対して預言をします。ヨハネは、絶えず自分に注目が寄せられた時に、「私ではない、私の後に来られる方がそうなのだ」と主張しました。自分は衰えて、主が引き上げられなければいけないと言いました。父ザカリヤも、ヨハネがあくまでも証しを立てるものであり、それは主ご自身の証しなのだということを強調しているのです。

彼の働きは、「主の道を備えること」です。王なる方が来られる時に、凸凹の道を平らにするようにその住民に伝達する、そういった働きをします。私たちは、とにかく、自分が初めに知識が与えられたら、それでもう分かっていると思ってしまう。しかし、本当に主が来られる時に、その心備えが出来ているか？というところではありません。

預言者サムエルの時代のことを思い出してください。彼がまだ幼子であった時、イスラエルの民はペリシテ人と戦っていましたが、彼らはなんと、神の箱を戦いの最前線に持って行ったのです。それで箱は奪い取られます。しかし主は、ペリシテ人を腫瘍で痛めつけました。そしてペリシテ人が、牛車に乗せて箱を返却したのです。それが、ベテ・シメシュという町に到着しました。そこにいるイスラエル人たちは喜びました。ところが悲劇が起こりました、民のうち七十人が、千人のうち五人が死んでしまったのです。それは、「主の箱の中を見た」からでした(Ⅰサム 6:19)。彼らは主を求めているようで、実は心はまだ偶像礼拝的なものに縛られていたのです。

そして、神の箱は祭司の家に、なんと二十年間、安置されていました。そして、こう書いています、「Ⅰサム 7:2 イスラエルの全家は主を慕い求めていた。」サムエルは成人してから、何人もかけて預言を行っていました。彼らの心は徐々に、主に開かれていきました。そして二十年経ってから、彼らの間にある異国の神々やアシュタロテを取り除きなさいというサムエルの言葉に彼らは聞き従ったのです。彼らが聞き従うまでに、それだけの期間がかかったのです。ですから、新約の時代にも、イエス様が来られる前に、主を受け入れるために、人々の心が備えられなければいけません。それが、ヨハネの働きだったのです。

そして、その働きの内容は、「罪の赦しによる救い」です。先ほど申し上げたように、救いといっても、敵からの救いといっても、単なる状況からの救いではありません。私たちの心に宿っている罪こそが問題なのだという悟りが必要なのです。それを知るための知識が必要だということです。ヨハネは、パリサイ人やサドカイ人がやってきた時に、「3:7 まむしの子孫たち」と呼びました。たんなる聖書の知識ではないのです、本当の意味の、神との関係に中的人格の関係です。そして、悔

い改めた者には、罪の赦しによって救いがきます。行いではありません。私たちは、自分の過去の行いに囚われています。成功にしても、失敗にしても過去に囚われます。しかし、主は罪の赦しによって、あなたを解放する。そして恵みによって、あなたは生きていくことになるかと教えています。

2D. 暗闇の光 78-79

78 これは私たちの神の深いあわれみによる。そのあわれみにより、曙の光が、いと高き所から私たちに訪れ、79 暗闇と死の陰に住んでいた者たちを照らし、私たちの足を平和の道に導く。」

再び、イエス様の話が戻ります。「曙の光」とはイエス様のことです。夜明けの光ですね。私たちが暗闇の中を歩いている時に、そこに夜明けの光のように主が来られて、そして、たとい暗闇や死の陰に住んでいても、そこに光が照らされます。これが、「神の深いあわれみ」とありますが、これこそが主の真実な愛です。愛とは、感情的なもの、感傷的なものではありません。何十年経っても、それでも真実を尽くしてくれる親と似ていて、いや、それ以上で、私たちが光の中を歩むことができるように真実を尽くしてくださるのです。

そして、その光の中にいれば、「平和の道」に導かれます。神の深い憐れみがあり、そこには神の一方的な恵みがあり、それは私たちが何をしたとか、どういった人物であるとかは関係ありません。その中に生きていれば、平安であります。神は私たちの心を平安で満たしたいと願われています。こうやって、ヨハネが道を整え、主イエスご自身がそこを平安で満たされるのです。

2B 幼子の成長 80

80 幼子は成長し、その霊は強くなり、イスラエルの民の前に公に現れる日まで荒野にいた。

ヨハネが成人する場面が、3章から出て来ます。ユダの荒野から現れます。ユダの山地と死海の間、またその北のヨルダン川の周辺が、ユダの荒野です。彼が現れるまで、ザカリヤと同じようにして人々の心が少しずつ用意されていたことでしょう。ヨハネという名を付けたこと、そしてそれを命名したら、ザカリヤの口がほどけたこと。こうしたしるしによって、主の御手が彼と共にあったことを人々は知りました。私たちは、このようにして、神の用意されている道があります。どこまで、主のしるしをしるしとして受け止めているでしょうか？驚くようなことを、驚いたままにして退けてしまっているでしょうか？それとも、心に留めて、主がいったい何をしておられるのだらうと思いを巡らしているでしょうか？